

『栄花物語』 続編を私家集から照射する (下)

—— 続編に描かれた藤原師実をめぐる物語から ——

Sequel of Eiga Monogatari (A Tale of Flowering Fortunes) (3):
From the Perspective of the tales on Morozane Fujiwara

加藤 静子

KATO Shizuko

はじめに

前稿では、続編は、正編のような年立てによる叙述ではなく原資料をつなぎあわせたのに近いとする見解に対して、方法とも言いにくいけれど、天皇と後宮との物語を中軸に、撰閲家の側から、描きたい人物の事跡について相互の関係をふまえて物語るものではないかという仮説のもと、いわゆる第一部と第二部をつなぐ人物として藤原師実注目した。そして、第一部から第二部に通底する叙述のあり方について検討した。

本稿では、第二部における師実について分析してゆく。前稿は、姉の皇后寛子の叙述についてもとりあげ、後冷泉天皇やその後宮運

営にも言及して多岐にわたってしまった。よって、まず前稿をふり返り、本稿の方向性について示したい。前稿の要点を示すと、以下のようになる。

ア続編は各天皇を比較して言及する傾向がある。その一つ、天皇によって、「制」が厳しかったり緩やかであったりするが、「制」を「服飾」と結びつけて記すのは、第一部第二部に共通していた。また師実について、後冷泉天皇や東宮と並べて記すという顕著な書き方があった。

イ師実が「少将」の時に「石清水臨時祭の舞人」をつとめたと記される。第二部には、孫忠実についても同様に記し、父師通については忠実の記事に挿入するかたちで記した。撰閲家三代にわたり記したことになる。

ウ卷三七には、頼通の弟たち頼宗・能信・長家ら三人の薨去が記され、末尾には宇治に籠もる関白頼通のもとに後冷泉帝が行幸する文章があった。一方、その前の卷三六では、頼通の弟たち三人の子息、俊家・能長・祐家らが師実と並んで登場している。後冷泉天皇の御代を記す卷三六・三七という両巻で、世代交代を描いていた。

工皇后寛子は、先に立后した中宮章子内親王とほぼ平等に描かれている。関白頼通は娘の入内後も、以前と変わらず章子内親王を大切に後見し続けていると描いていた。

卷三六の巻末、四条宮寛子の春秋歌合記事を置き、豪華絢爛たる女房服飾を詳細に記している。歌合催行時点を承知しながら、時の流れを無視して巻末に位置づけ、その後にいわゆる卷三六の跋文とも見なされてきた書き手の自己言及的な文章が続いていた^①。何故にそのような必要があったのか、にも言及した。アエに関係して、続編の執筆時点を視野に入れると、父後三条院の「制」を堅持した白河院に対する配慮があったかとした。そして続編は、天皇としては強烈な個性の持主の白河院を意識せざるをえず、主催者側ではなく、書き手の女房層を主体化する文脈でいわゆる過差を弁明する余地をもたらし、と解した。

本稿では、第二部の師実登場について追跡する。続編は、「天皇の御代に着目して歴史が組み立てられている」という指摘もなされ、また師実記事について天皇と無関係に読むのは無意味でもある。よって、ほぼ天皇御代ごとの各巻に節を分けて進めたい。

卷三八は後三条天皇の御代、関白教通時代を対象とする。卷三九は白河天皇の御代、教通薨去により師実が関白となる。師実の養女

賢子が立后、皇子女五人も誕生した。嫡子師通は元服、内大臣にまで至る。この巻については、師実・中宮関係と、師実の嫡子師通関係・他腹の子女たちとで、節を分けて記したい。卷四〇は、中宮賢子の崩御、失意の白河天皇が讓位し、賢子腹の善仁親王が即位、堀河天皇である。師実は摂政となる。白河院に関しては、鳥羽殿の造営、物語で、皇女たちとの交流などについて描かれる。師通男の孫忠実が元服、結婚して中納言に至り、春日祭使をつとめる記事で続編を閉じている。

なお、工に関わって第一部と第二部とがいかなる連続関係にあるかは、紙幅の都合で別稿に譲りたい。

一 卷三八「松のしづえ」に描かれた師実

——養女賢子の東宮参り、源基子腹の皇子後見——

卷三八は、御代がわりを記さず、後三条天皇が一品宮聡子内親王付き女房である源基子を寵愛し、基子は懐妊し内裏を退出して出産、という一連の記事で始動する。誕生したのは男御子であった(以上、新編全集小見出しの②③)。後三条天皇の践祚は治暦四(一〇六八)年四月、男御子の誕生が延久三(一〇七二)年二月のことなので、卷二七巻末からは二年以上の空白期間をおいて書き起こされたことになる。本巻には約四年ほどが記される。

男御子誕生は、源氏物語の桐壺巻を踏まえる。身分の低い基子を桐壺更衣に、男御子を光源氏誕生に擬す。続編では、桐壺更衣や光源氏の軌跡と違って、基子は女御となり、御子実仁親王とともに内裏に入っている(四)。中瀬将志氏「源基子と桐壺更衣」が、源氏

物語と比較しながら、続編の基子と御子実仁に関わる表現の機微についてよく伝えているので、参照されたい。

後三条天皇の治世について、関白頼通もからめて、反実仮想で後冷泉天皇の理想性を述べてから、師実に関する記事に入っていく。師実養女の賢子が東宮貞仁親王(後の白河天皇)に入る。その経緯を次のように記す。

〔五〕 またも世にはめでたきことのあるべきにや。今の右の大殿の二郎(源師房の二男顕房、中納言にて、左兵衛督にてもものしたまふ、この左の大殿の上(師実室麗子)の御せうとなり、その御姫君を、大殿の上、子にしたてまつらせたまひて、東宮に参らせたまふべしと聞えつるを、にはかにこの晦日の日、内より、疾く参らせたてまつらせたまへとありければ、この

三月九日参らせたまふ。……宇治殿の人ならぬ人何か、さながら靡きしまつれる。(師実は)ただ今は二の人にておはしませど、関白にておはしましし宇治殿にも劣り申させたまはず。……(③四三五頁)

師実は、「左の大殿」として、登場する⁽⁴⁾。師実夫妻養女の賢子の出自を紹介し、噂として聞こえていた東宮貞仁親王への入侍が、後三条天皇の仰せにより「疾く」ということで、「三月九日」に実現となった(延久三年のこと。師実三〇歳、賢子十五歳)。

右傍線部、師実は、関白教通に次ぐ「二の人」として登場するのだが、前稿で巻三二六に「世の固めとならせたまふべき一の人だち出でおはしませしける……」(③三八三頁)と呼応するような書きぶりであり、また「関白」であった「宇治殿」にも劣ることがないと評価する。

なお、引用は省略したが、賢子の春宮参りの準備期間は十日ほど

の短さであったけれども、室礼も女房の装束も不足ないすばらしさであったという。師実室の麗子もつきそう東宮参りは、残る人なくお供し、「おろかならず響きて参りたまふを、東宮大夫の女御いかに聞きたまふらん、かたはら苦しげなり」と先に入侍していた能長女道子の心中を思いやる。続いて、「昼渡らせたまふ」と東宮が賢子のもとに日中渡御する。供奉の人々、迎え入れる公卿の名前をかき立てて、「今日の衣の色などは、宇治殿、宇治大納言など定めたまひて、ことうるはしくきよげにせさせたまへり」と記し、

女御殿は十四五ばかりにて、いと若くうつくしげにおはしませり。御おぼえさまあしく、まだしきより著き御気色なり。(③四三七頁)

で結んでいる。

ところで、引用文〔五〕の波線部では、後三条天皇の命により東宮に入れたと記す。賢子の東宮参りは、父帝の意向で行われたという記述を、より重く読む必要がある。巻三七以前のいわゆる第一部における入内の描き方と大きく異なり、天皇としての力を色濃く記しているように思えるからである(続編には記されなかったが、後に堀河天皇に入内する女性を決めたのも、父白河院)。

巻三七以前の八人の女性の入内・東宮参りを、比較する意味で見てもみよう。描かれた順序で示して、誰が誰を入内させたかの、「誰が」が明示された人物を「」内に記した。また、「↑」の後に、記述がある時点を記した。*印を付したのは、入内の年月は記されず、事柄のみが記されている記事である。

①巻三四、「殿」(関白頼通、養女姫子を後朱雀天皇に入れる。

↑長元十(一〇三七)年正月七日

②卷三四、「殿(関白頼通)・女院」、一品宮皇子内親王を東宮(後の後冷泉天皇)に参らす。

↑長暦元(二〇三七)年十二月十三日

③卷三四、「内の大殿」(教通)、女「御匣殿」生子を後朱雀天皇に入れる。

↑長暦三(二〇三九)年十二月

④卷三四、「入道一品宮」(脩子)、養女「東宮大夫(頼宗)女延子」を後朱雀天皇に入れる。

*長久三(二〇四二)年三月

⑤卷三六、「内の大殿」(教通)女歡子、女御代をつとめ、その後冷泉天皇に入る。

*永承二(二〇四七)年十月十四日

⑥卷三六、「関白殿」(頼通)、女寛子を後冷泉天皇に入れる。

↑永承五(二〇五〇)年十二月

⑦卷三六、「東宮大夫」(能信)、養女茂子を東宮(後の後三条天皇)に参らす。

*永承元(二〇四六)年十二月

⑧卷三六、「上東門院」、皇子内親王を東宮(後の後三条天皇)に参らす。

*永承六(二〇五二)年十一月

第一部の「誰が」について見ると、④の延子は養女にした「一品宮脩子内侍親王が入内させている。実父頼宗はまだ「東宮大夫」(大納言)の時であった。⑧の皇子内親王は、母中宮威子亡き後、姉の皇子内親王とともに女院彰子が養育していた。「上東門院」一人を記すが、②の姉同様に、関白頼通が、「そのほどの御有様、殿たち

みあつかひたてまつらせたまふ」と連携する姿をも記している。②④⑧の三例以外は、父あるいは養父が女を入内させる文脈となる。

右の八例のうち、入内・入侍に記事の流れから「年」をたどることができ、「月」が明示されているのは、①②③⑥の四人のみ。それらの人物と、時点不明の*印を付した人物とで、差が見えてくる。年月が記されているのは、続編で重く扱われている女性たちで、①頼通の養女姫子、②皇子内親王、⑥頼通女寛子という、関白頼通が関わった女性たちである。ただし、③の教通女生子が「十二月」とあるのは、姫子中宮が亡くなってからわずか三箇月後の入内というスピードを印象づけ、関白頼通の不快感を描くことに関係する。寵愛は深い、立后の条件にはあわず、父の願いむなく立后はできなかったと物語る。なお、⑤の教通女歡子についてだが、卷三七を閉じ卷三八開始する間の空白時期に、父教通が関白となり、後冷泉天皇の崩御直前に立后させている。続編にはそれを記さない。また、後三条天皇の東宮時代に関して、⑦能信養女茂子の東宮参りについて、白河天皇生母であるにも関わらず、あるいは摂関家と遠い家という関係からか、時の流れにすら置かれずにいる。

右の婚姻すべてに彰子の承諾が確認できるが(服藤早苗氏「藤原彰子」吉川弘文館、二〇一九)、その位置づけの差は大きい。

ここで卷三八にもどる。賢子の東宮参りの後は、先に東宮に入っていた道子について、

丙 東宮大夫殿の女御、三十ばかりにもせさせたまふ。いとあてになまめかしく、恥づかしげなる御有様なり。心とけず、ものおぼし知り、心深げにぞものしたまひける。……(後三条天皇は、道子の父能長を故能信の子として、「睦まじきもの」にしていたの

で、世の人も能長のもとに参上していた。

内には、「この女御たち(賢子と道子)なだらかにあまねく思しめせ」と申させたまへど、この今女御殿(賢子)を、片時見たてまつらではえおはしまさず、夜昼こなたにのみおはしまして、かつ見るともかかると見えさせたまへり。

(③四三七頁)

㊦と㊧と、東宮女御の二人を並んで記すのは、卷三六・卷三七の中宮皇子と皇后寛子と並べ描くの似るが、二重傍線部「かつ見るとも」は、「陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ」(古今集・恋四の巻頭歌)の引歌で、妻として迎えていながらなお恋い慕う東宮の様子を伝えていて、その寵愛に大きな差をつけているように描く。それは、続編が記した後冷泉天皇の理想的後宮差配とはかけ離れている。なお、道子の東宮参り(延久元年二月)も卷三七と卷三八との間のことで、記されていない。

引用文㊨の点線部に關して、「撰関家の勢威の回復を危惧する後三条天皇の深謀遠慮に発する発言であったとおぼしいが、同時に卷第三十九、卷第四十において白河天皇の賢子寵遇をとらえて撰関家が以前の勢威を回復する様を展叙することと連関している」(注2論文)との指摘がある。卷三九以降の展開はそのとおりとしても、すでに後三条天皇本人が、師実に賢子の東宮参りを勧めたと記して、「深謀遠慮」とは言いにくい。後三条天皇も続編が理想とする後宮差配と同じことを我が子に忠告した、と読めようか。

続いて、㊩「実仁親王の五十日」が記される。五十日は四月十余日(延久三年)に行われ、

御前物、上達部とりつづきてまゐりたまふ。例は殿上人こそ雜

役は仕まつるを、せめて心ことに思しめすなるべし。左の大殿抱きたてまつらせたまひて、上のくくめたてまつらせたまふほど、抱き移したてまつる御乳母など、なまよろしからんはいとわりなかるべし。

(③四三九頁)

師実が実仁親王を抱き、天皇が餅をくくめる。それは、中瀬将志氏前掲論文に、正編に描かれた敦成親王の五十日の祝いの倫子と道長に重なり、「後三条天皇と師実の協調関係が印象づけられている」とした。賢子の東宮参りとともに、「師実は天皇家との結びつきを強めつつあった」とし、師実が当時東宮傳の職務にあり、また、実仁親王が後に東宮に立つと師実はまた東宮傳となるという天皇家との関係を踏まえ、「後三条天皇のみならず師実をも実仁親王の庇護者として位置づけられるべく描かれている」とした。確かにそのように描かれている。

続く、「①」新造内裏還幸、後宮の有様、「②」祇園、日吉に行幸。地震」は、簡単な記述ながら、後三条天皇時代を特徴づける内裏の建立、および神社行幸を記す。三橋正氏「国家的神祇儀礼の変遷と天皇の神祇信仰」によると、後三条天皇は歴代天皇と同じく、延久元(一〇六九年)三月に石清水行幸、八月に賀茂行幸、翌二年に春日・平野・北野社、三年に大原野・松尾社と前代まででない早さで七社すべての行幸を終えて、再度の春日行幸、十月に日吉行幸、延久四(一〇七二年)年に稲荷・祇園行幸と、新たに三社(傍線を付した)行幸を加えたという。「③」は、後三条天皇が新たに加えた行幸について記したことになる。

「斎宮俊子内親王、伊勢へ下向」(④⑤)、「篤子内親王、斎院となる。祐子内親王の出家」(④⑥)と後三条の二人の皇女たちが斎宮、斎院

となると記す。後三条の異母妹祐子内親王が斎院になるのを避けて出家したことに対する、天皇の怒りにも触れた。

続いて、後三条天皇の讓位が語られ(二〇六)、女御源基子腹の実仁親王が立太子する(延久四(一〇七二)年十二月八日)。讓位前の、女御基子を准三宮にと、東宮の母にふさわしい待遇記事をおく(二〇五)。讓位後、基子はまた男宮輔仁親王を産する(二〇二)。

後三条院の「水などきこしめす」(飲水病)と病に触れるが(二〇〇)、延久五(一〇七二)年二月二十二日、院は石清水・住吉・天王寺に参詣する。母陽明門院と女一宮聡子内親王を連れだつてのもので、巻名「松のしづえ」の由来となる。出立から帰京まで(二〇三)~(二〇五)、資料性の高い文章でかなりの紙幅が費やされている。院、関白以下の和歌が四十五首連なる。参詣記事末尾に、

……淀におはしまし着きぬ。このほどに左大臣御迎へに参りたまへり。いと重々しく、きよげにめでたき御有様なり。

人のまねぶを書きつくれば、ひが事そらごとならんかし。

(三四五八頁)

と左大臣師実の御幸を迎える姿を記す。帰京後、後三条院は病が重くなり四月二十九日出家のこと(二〇〇)、中宮馨子も出家、母の陽明門院の姿も映し出す。続いて、五月七日に院の崩御のことが記される。内親王たちや女院の悲しみを記す。一品宮聡子、女御基子、院の姉宮良子、堀河女御昭子たちの出家も記された(二〇三)。中瀬氏は、女御基子・実仁親王については、本巻でほぼ書くべきことは終了していると指摘する。

巻末には、後冷泉崩御をもあわせて悼む少将の内侍と大式の三位の贈答歌、他三首後三条の追悼歌を記して、巻を閉じている。

二 卷三九「布引の滝」の師実

——師実の任関白、養女中宮賢子に皇子女たち誕生——

本巻は白河天皇の御代、約十年間の出来事を描く。

巻頭は、「宇治殿」頼通の薨去記事を記し、巻末には賀茂祭の翌日、関白師実が中宮賢子腹の善仁親王と同車して還立を見物する記事をおくように、師実とその一家に焦点をあてた記事が目立つ。巻名「布引の滝」も、師実が人々をひきつれての遊覧によるもので、師実以下一行の和歌が九首ほど記されている。

本巻では、師実家の相次ぐ慶事が多く描かれている。白河天皇が即位し、養女賢子は中宮に立ち、師実は関白教通の薨去をうけて、関白となる(承保一(一〇七五)年十月)。

師実は、卷三六に「一の人」めいて「世の固め」となるべき人物と触れられ、卷三八には「ただ今は二人」とあったが、「一の人」が実現した(時に三十四歳)。その前年に、中宮賢子には白河天皇の皇子敦文親王が誕生した(承保元年十一月)。御堂流の女性に男皇子が誕生したのは、実に敦良親王誕生(寛弘六(一〇〇九)年)以来のこと、六十五年ぶりとなる。その後も、中宮賢子は皇子一人皇女三人をうむ。一宮は赤裳瘡で亡くなったものの、二宮善仁親王は健在であり、卷四〇で堀河天皇として即位する。師実は白河天皇皇子女たちの祖父になった。

以上のように、本巻では、白河天皇中宮賢子をして次々に誕生した皇子女たちの存在が、何といつても重い。そこで、師実本人とその子女たちが描かれた記事と、中宮賢子と皇子女たちが中心的に描かれた記事とを、グループに分けて整理し、その小見出し番号を次

に示す。なお、師実関係記事の(一)内の記事は、師通・忠実ほか子女たちに関わる。

◇関白師実関係記事

〔一〕～〔三〕、〔六〕、〔五〕、〔四〕、〔三〕、〔二〕、〔四〕、〔六〕、〔七〕、〔五〕、〔三〕、〔四〕、〔三〕、〔四〕、〔四〕、〔四〕、〔五〕、〔五〕、〔四〕、〔五〕、〔五〕、〔五〕

◇中宮賢子関係記事

〔六〕、〔六〕、〔五〕、〔五〕、〔三〕、〔五〕、〔五〕、〔六〕、〔六〕、〔四〕、〔四〕、〔四〕、〔五〕、〔五〕

関白になった師実は本巻になると、ひときわ存在感大きく描かれることになる。それは中宮賢子と不可分の関係がある。そこで、嫡子師通や他の師実子女、孫忠実についてなどは、次節でとりあげることにしたい。

本節では、師実本人と中宮賢子関係の重要と思われる記事を中心に、物語の流れにそって言及したい。まずは、巻頭「頼通薨去」から見ていく。

〔一〕 宇治殿重く悩みわたらせたまへば、いつとなき御事にて過ぎつるを、つひに二月二日にうせさせたまひぬ。左の大殿、皇太后宮など、思めし嘆かせたまふさまおろかならず。右の大殿も、年ごろの御恩のほど思しめすに、劣らぬ御心の中なり。高倉殿の上、「一の宮などもいかがおろかには。八十余年世の一人にておはしましたしつる御蔭に隠れつる人々いくそかは。高きも短きも、釈迦仏の隠れたまへるをりの有様に劣らず涙を流したり。」

頼通薨去は、白河天皇の御代延久六(一〇七四)年二月二日であつ

③四六五頁

た。頼通死を悲しみ嘆く人物が列挙される。その順序に注目したい。まず、嫡子師実、姉の四条宮寛子、次に「右の大殿」頼通養子源師房となる。その後、「高倉殿の上」頼通正室隆姫、養女娘子女腹の皇女「一の宮」祐子内親王の順となる。頼通は、現実的には、隆姫を重んじ、孫の祐子内親王を幼くして准后にし、内親王方で歌合や遊びなどを催して公卿や殿上人を招くなど、その後見ぶりはよく知られていたのだが。

源師房は、正編から登場し続編にも巻二二から登場していたが、次節に記すように巻三九で特筆されている。関白頼通を政治と文化の両面で、藤原頼宗(頼通異母弟で、その妹尊子は師房妻)とともに支え続けてきた人物である。娘麗子の夫師実にも同様であったので、第二部は記録性には乏しいものの、現実世界と大きく連動していることがわかる。

ところで、点線部のように、頼通の死を釈迦入滅をひきあいに出し、「高きも短きも」と人々の涙を流す悲しみについて描くのは、正編の巻三〇「鶴の林」で道長死と葬送に際して釈迦入滅に喩えた記述を受けて、正編道長と続編頼通を連結させる意図があるう。

続く、「僧俗ともに頼通を追懐」では、

〔一〕 山々寺々の僧なども、さまざまにとぶらはせたまふ、をりにつけて夏は涼しかるべきさまに、冬は風を防ぐべき御心掟、さびしきほど思しはかりとぶらはせたまひし、心きよき奥山の聖どもに、百万遍を満てさせとぶらはせたまへるを、いかでか世にはあるべからんと、偲びまうすさまあはれにいみじ。入道殿の六十余年栄えさせたまひて隠れさせたまひしだに、いかがは人の偲びまうし。これはた今年八十三にぞならせ

たまひける。……

(③四六六頁)

と、まずは頼通の僧侶に対する庇護が語られている。頼通が宇治の御堂にこもり、出家していた(延久四(一〇七二年正月)こともあり、「山々寺々の僧」、「奥山の聖」たちの、もうこのような人はあらわれないと、偲びなげくさまがまずは語られている。

そして、道長の六十余年の生涯に比し、頼通の八十三歳という年齢をあげて、道長の時よりもさらに偲び慕ったと表現する。卷三〇「鶴の林」のような仏教語を駆使した表現は見られないが、僧侶たちや身分低きいわば衆生が頼通を偲んでいる。

続く(三)「四十九日の法事」では、法事を終えて京に帰る「御心の中」として、今度は、師実一人を焦点化して記している。

御代がわりにともない、齋宮・齋院に触れてから、懐妊した賢子が「六月八日」立后する記事が置かれる(四)。後の空席がなく、太皇太后宮皇子内親王が女院となり、順次くりあがる。里邸の東三条第で賢子立后の大饗が行われ、まもなく内裏に還御とある(五)。

「女院」皇子の登場は、養母「大女院」彰子の病を見舞う記事へと移り、大嘗会御禊に触れて女院彰子の崩御、葬送と続ける。そこで、兄頼通の死の場面には一言も触れられなかった、関白教通の悲しみと葬送に参加している様子が描かれる。

その後、また中宮賢子関係記事が続く。第一皇子敦文親王を産産、「承保一年正月二日、七日夜に当りたれば」と、産養が白河天皇主催で行われ、それは、「後一条院の御産屋に紫式部のいひつづけたる、同じことなり」と記された。八日目にあたる翌日、白衣から色々の衣装に変わり、まもなく東三条殿に移る。そこに白河天皇の行幸があり、敦文親王に對面、中宮賢子と皇子をともない、内裏

に還幸する。このように、男御子誕生、立后、寵愛の「三つの事のさしあひて」と、二〇歳にもならぬ賢子の不足ないめでたさを強調し、再び、賢子は懐妊したと記す(五)。(六)。

めでたさに続く記事に、関白教通が薨去(承保二(一〇七五年)九月二十五日)、師実に関白となる宣旨が下ったと、次のように記している。

(七) 九月二十四日に、左の大殿大井川に紅葉御覽じにおはしますとて、殿上人、上達部参り集まり、殿も例ならずなべてならぬ狩の御衣奉らんとせさせたまふほどに、関白殿御風の気色おはしますとあれば、とまらせたまひぬ。三四日ばかりありてうせさせたまひぬれば、左の大殿関白の宣旨かぶらせたまひぬ。朱器、台盤などもてわたり、めでたきことかぎりなし。

(③四八〇頁)

とある。この記事に関係して、『古事談』(卷二の二三話・二三話)を生かし、『水左記』に、教通薨奏がないためにとりあえず師実には内覧宣旨が下され、関白宣旨が教通死後十九日も経った十月十五日になったとして、「関白教通が関白を子息信長に渡すために死ぬまで策動していたことを如実に示している」という見解がある。それを『栄花物語』の読みに生かす人もいる。『水左記』記事から、そこま

で読み取るのは無理があるろうか。『栄花物語』では、それまで教通その人について正面からとりあげることは少なかったが、

内の大殿(信長)に譲りたてまつらまほしく思しけめど、宇治の関白殿の譲りたてまつらせたまひし御心を思しめせば、いかでかは。またさりとて、内の御気色などのさるべきにもあら

ず。故院の御時に、内の大殿になん譲らせたまふべかんなるな
ど聞えしをりにも、「宇治殿の間かせたまはんが、かたはらい
たきこと」とぞのたまはせける。御心いとなだらかによくおは
しましけり。一院いとあざやかにすすくしく、人に従はせた
まふべき御心にもおはしまさざりしかば、関白殿も、え御心に
もまかせせたまはずなどありしかど、末になるままには、御
仲らひよくおはしまして、御心地のほどもつとさぶらはせたま
ひ、たち去らせたまふをりは尋ねまうさせたまひける。

(③四八〇頁)

と記されている。傍線部のような教通の性状から、院との仲もよく
なり、崩御後は、「故院の御事を思へば」と東宮にもよく参上して
と、幼い東宮とのエピソードも記されている。

師実が関白になったところで、次節にとりあげる、嫡子師通や、
女房たちに生ませた子女について言及する(三三)、(三四)。時の流れに
位置づけるのではなく、このように嫡子や子女たちを紹介するにふ
さわしいタイミングで記すことに注意したい。

中宮賢子が媼子内親王を出産、「女宮にておはします」、「心苦し
き方添ひて、うつくしういみじと思ひまうさせたまへり」と、殿の
上源麗子の思いが特筆され、乳母二人の名が記される。また、若宮
と姫宮きょうだいの点描されている(三三)。

師実の「布引の滝」遊覧―巻名の由来―を記し、関白師実の歌以
下、同行した人々の和歌九首が見える(三四)。

年も変わって、承保四(二〇七七)年となる。

(四) 正月一日、宮たちの戴餅

(五) 正月二日、師実邸の臨時客

(五) 正月十一日、東三条第の陽明門院に白河天皇の朝覲行幸
正月一日男宮女宮二人そろっての戴餅のめでたき、二日師実の臨
時客のめでたき、十一日朝覲行幸に触れた。記録類からも、師実の
臨時客は「正月二日」が恒例と確認される。また、白河天皇の朝覲
行幸が、祖母陽明門院禎子になされている。

……院の御前には、あはれにいみじう思しめさる。拝したてま
つらせたまふほどなど、涙ぐましく思しめす。人々加階多くし
たり。

(③四八七頁)

わずかな行数ながら、関白師実が、私邸の東三条殿に陽明門院禎子
を迎えて、そこに行幸があるという、いわば女院までも師実が後見
している様子が記されている。

その年、「四五五月ばかりより赤裳瘡といふこと出で来て」と疫病
流行があり、多くの人々が亡くなった。賢子腹の一の宮敦文親王も
回復せぬまま、「八月六日」(承保四(二〇七七)年)亡くなる(三六)。
女御道子には女宮が誕生(承保四年九月)、「口惜しくおぼしたれど」
(三七)と、さりげなく皇子薨去に皇女誕生記事を対置させている。

中宮賢子は参内しても皇子のことが思い出される。女一の宮媼子
内親王までが齋宮になり手許から離れると(下定は翌承暦二(二〇七八)
年八月のこと)、先取りして悲しみを強調する(三六)、(三七)。白河天皇
は摂関家の白河殿の地に、法勝寺を建立、その供養が盛大に行われ
る(承保四年十月、四〇)。中宮をはじめ、陽明門院、天皇姉妹の内親
王たちも参会したと丁寧に描かれる。

年が変わって(承暦二(二〇七八)年)、正月戴餅に、亡くなった一
の宮が偲ばれる。

(四) 年かはりて御戴餅のをりも、こと忌せさせたまはず、いみ

じき御心の中なり。殿の上などは、ただ月日の過ぐるにつけても、たくひなくいみじかりし御かたち、有様の恋しう、いみじうかぎりなきものに思ひきこえさせ、慕ひまつはさせたまへりし御有様など、いみじう思しめし申させたまふ。

(③四九八頁)

〔殿の上〕麗子を特筆して記す。次に、二月一日、宇治で法華八講が行われる。頼通の忌日に行われたものであろうが、「中宮の御産屋近くならせたまへば、やうやう御祈りなどいみじうせさせたまふ」(四三)と、今度は師実を傍線部のように焦点化して提示する。

次は、「内裏歌合」『後拾遺集』撰定」と白河天皇の事跡が並ぶ。なお、*は実際の年次。

〔四〕 三月つごもり、内裏に歌合せさせたまふ。例の左右挑み、えもいはぬ州浜など、例のことなり。何ごとにもいとめでたくおはします世にこそ。

*内裏歌合……承暦二(二〇七八)年四月二十八日のこと。

〔四〕 集など人々に召してえらせたまふ。「過ぎにしことを失はじ、今よりのことをも散らさじ」とある古今の序思ひ出でられる。昔に返りて、大井の行幸歌合など、いとをかしき御時になん。

(③四九九頁)

*後拾遺集の奏覧……承保二(二〇七五)年九月の下令、応徳三(一〇八六)年奏覧。

*大井川行幸歌合……行幸は承保三(一〇七六)年十月。「歌合」は、「歌合」か。

前稿で、続編は人物中心に描かれる傾向が強いと指摘したが、右のように白河天皇の内裏歌合が、後拾遺集撰進・大井川行幸のこと

と一括して記されている。

続いては、中宮の女一宮のこと、さらに女宮二人と男宮出産記事などが、ほぼ連続して記されている。

〔四〕 齋宮卜定(承暦二(一〇八七)年八月二日)をひかえ、「四月十日」に媯子内親王の袴着(年次の確認できない)。

〔四〕 中宮賢子、「五月十八日、いとやすらかに女宮を生みたまつらせたまへり」、令子内親王が誕生(承暦二年同日)。皆残念がるが、「殿の上」がとりわきかしづく。

〔四〕 師実は、妻麗子を連れ、「九月二十三日」石清水八幡宮に参詣(承暦二年同日)。

〔四〕 「十二月」に齋宮の御禊があり、媯子内親王は初齋院に入る(記録に確認できない)。

〔五〕 中宮賢子、男宮(善仁親王)を出産(承暦三(一〇七九)年七月九日)。

〔五〕 中宮賢子、榎子内親王を生む(誕生は承暦四年)。皇女は四条宮寛子の養女となる(承暦五年八月十日)。

右には、賢子宮たちのことに、一つだけ師実夫妻の石清水詣が混じっている。この参詣は、〔五〕男宮誕生と繋がっているように思える。というのも、後述するように、白河天皇は石清水社と賀茂社の行幸を毎年行うと定めていた。石清水社は天皇家に深く関わる神社で、正編では石清水臨時祭は二例のみ軽い扱いで記されているが、続編は重ねていて、前稿に師実―師通―忠実三代にわたり臨時祭舞人をつとめた記事について言及したとおりである。

〔四〕 大臣召し(承暦四(一〇八〇)年八月)

〔五〕 右大臣俊家と内大臣能長二人が薨去（永保二（一〇八二）年十月、十一月）

〔五〕 「俊房・顕房・師通、左・右・内大臣となる」（永保三（一〇八三）年正月）

師房男の二人が左右大臣に、師通が内大臣となる。ひき続いて、五 凸「善仁親王、祭およびその還立を見物」について、次のように描いて卷三九を閉じている。

二の宮の五つにおはしましたしに（永保三（一〇八三）年にあたる）、祭の棧敷にても御覽せし御有様のめでたさに、帰さ御覽じに、またの日、紫野に渡らせたまひし御有様のめでたうつくしうこそ。北の陣に、大殿御唐車寄せさせたまひて、若宮抱かれさせたまひて、殿さしそおはしますに、殿上人、上達部さるべきかぎり御供にさぶらふ。紫野のはるかに広きに、御供の人、皆降りて居並みたり。二の宮御車よりさし出でて御覽するたびごとに、見まゐらす人めでまうさぬなし。殿の御有様、常よりもいとめでたく見えさせたまふに、宮のさしならはせたまへることをぞ、行く末はるかに光添ひ出でさせたまへる御有様と、祭の帰さよりも心ことに御車のあたりを、めでたく世の人めでまうさぬなくなんありしとぞ申し伝へたる。

（③五〇六頁）

傍線を付した「二の宮」が善仁親王で、次の卷四〇で帝位につく。新編全集には、「大殿」は関白師実、「殿さしそひ」の「殿」は師通、点線部の「殿」は師実と解している。

師実の「大殿」呼称は、後に 師実が関白職を師通に譲った（寛治八（一〇九四）年三月九日に辞し、翌日師通が関白となる）後に生まれる

呼称であつて、本来の本文には、「大殿」は単に「殿」と記されていたかという疑問は残るが、卷四〇にもう一例「大殿」呼称が見える。現時点では、直前の〔五〕記事に師通の任内大臣のことがあり、続編では師実も大臣になると「殿」呼称が見えたので、右の引用文は、「大殿」は宮と車中にあり、「殿」つまり内大臣になった師通は、殿上人、上達部と同様に馬でお供したと解しておきたい。

「二の宮」は賀茂祭りを棧敷席で見物、翌日の紫野で還立を車中から見物するという光景を記して、点線部のように、常よりもめでたく見える「殿の御ありさま」師実^③に、二の宮が「さしならはせたまへる」のを、「行く末はるかに光添ひ出でさせたまへる御有様」と讚美して、巻を閉じている。その描き方は、卷八「初花」で、道長が賀茂祭の日に孫の敦成親王（後の後一条天皇）を抱き、棧敷の御簾をかかげさせて齋院選子に御覽にいれ、翌日に齋院から「光いづるあふひのかげを見てしかば年へにけるもうれしかりけり」の贈歌と、道長からの返歌を記すが、それらを思いおこさせる。この巻末は、二の宮と外祖父師実ともどもを余祝した表現と解せよう。

三 卷三九「布引の滝」における師実嫡子師通、他腹の子女たち——付、源師房と藤原源房——

師通の誕生については卷三七に描かれていた（前稿の第四節）。卷三八に師通の登場はなく、卷三九に父の左大臣師実が関白教通薨去を受けて関白になると（〔三〕（承保二（一〇七五）年九月、三四歳）、その記事に続いて、次のように描かれる。

〔三〕 左の大殿（師実）の御有様いとめでたし。この御腹の若君は、

ひととせ御元服せさせたまひて、中将にておはします。春日の使に立たせたまふ。昔、宇治殿の少将にて使せさせたまふに、入道殿の「心づかひを」と詠ませたまへる、思ひ出でられてあはれなり。 (③四八二頁)

傍線部が師通で、元服して(延久四(一〇七二)年正月十一歳)、今は中将となり、春日使に立ったことを記す(承保三(一〇七六)年二月時に十五歳)。そして、正編の巻八「初花」巻頭に描かれた、祖父の頼通と関係つけて記す。道長の贈歌の一節「心づかひを」を引用して、「思ひ出でられてあはれなり」と表現するのは、道長―頼通―師実―師通という系譜に、二組の父子を記す意識があるろう。なお、傍線部「この御腹の若君」と、正妻源麗子腹であることに触れるのは、次に他腹の子女たちに言及する文脈上にもある。

(二) 殿は、皇太后宮に頼国が女さぶらひけるを思しめしけるに、男二人ものしたまひける、少将と聞ゆ。今一人、仁和寺の宮に奉らせたまへり。散りたる御子どもいと多くておはします。同じほど、よそ子のやうに生ませさせたまへり。やむことなきにはあらで、さるべきかたちよき名とりたる所どころの中臈の人々なり。故女院(彰子)の中納言の君とて、右の大殿(頼宗)の御子に、美濃守基貞と聞えし人の女の腹にぞ、あまたものしたまひければ、女院いと心苦しとて、女君をばいみじうかしづかせたまひて、上に、乳母などもやむごとなきをとらせたまひて、さぶらはせたまひて、今さらにと人に言はれさせたまひけれど、これに後の世のこの妨げられればこそはあらめ、この世はさはれとてぞ、思しめしかしづかせたまひける。されど、女院うせさせたまひにしかば、いかがものしたまはんずらん。男

君は二所ながら迎へさせたまへり。 (③四八二頁)

師実に関しては、巻三六に、結婚する前の時点で、「まだきより色におはしまして、忍びありきいみじうせさせたまふ」と年少なのに好色な面があつて、姉寛子に仕える少少将に男子を産ませた記事が見えた(三六)。さらに、結婚後も、「……色めかしくあだにおはしますも、若きをりにさものせさせたまはぬ人やはある。さればこそ、をかしくなまめかしきことも出で来れ。いとうるはしきは、すさまじくすくよかなりかし」(三六)とあつた。

関白になつてから、右の点線部のようにかなり赤裸々に記している。あちこちの美貌という評判の中臈女房たちに子どもを生ませ、「散りたる御子どもいと多く」とある。その中で、関白師実の子として明記されたのは、傍線を付した、「皇太后宮」寛子の女房頼国女腹に「男一人」少将(家忠)と仁和寺宮(師明)にあずけた僧(静意)、さらに「故女院」彰子の女房で右大臣頼宗男基貞の女腹には、女君と男君二人(経実・能実)とである。女君は女院がかしづいていて、男子二人は師実がひきとつたという。僧侶以外の男子は続編が対象とする歴史内で公卿に¹⁴ついている。また、新編全集の頭注を見ると、尊卑分脈から他には、「忠教、忠長、覚実、仁源、覚信、澄真、増智、行玄、玄覚、尋覚、仁澄、永実」の名があがると指摘する。

女院彰子がかしづいたという女君は、巻四〇で堀河天皇の大嘗会御禊に女御代をつとめている。右に子として待遇された公卿になった人たちは、だが、この後の登場はない。続編では、養女中宮賢子とその皇子女たちとの関係からも、正妻の麗子が重く描かれている。

師通のその後だが、(四)父関白師実が布引の滝に逍遙した際、「三

位中将」として和歌を残す。そして、『丙 父師実の承保四(二〇七七)年正月に行つた臨時客が記され、その次に「この冬」(承保三年)に時間を遡らせて、師通の結婚が記されている。

〔七〕 中将殿は三位にておはします。この冬、民部卿(後家の婿にならせたまひにき。内の御いもうとの宮たちになど聞えつれど、いかに思しけるにか、かくなしたてまつらせたまへれば、いみじうもてかしづききこえさせたまふ。四にあたらせたまふ姫君になんものせさせたまひける。この民部卿は、……

(③四八六頁)

相手の女性性は、入道右大臣頼宗の子である民部卿俊家(卷三二から登場、卷三六では師実とともにその名が並んだ)の四女にあたる姫君とわかる。師通の結婚相手には、点線部のように、白河天皇の妹の皇女たちが噂されたらしい。誰かは不明。続編では、四の宮篤子内親王が卷三九以降にも登場する。続編の最終記事以前に、元服した堀河天皇に入内しているが、元服も入内についても記さない。篤子内親王は、師実養女となっている。

師通が結婚した俊家女については、卷三八で、東宮大夫能長女で東宮の女御になった道子にことよせて、次のように見えた。

民部卿は、時うしなへるにてものしたまふ。姫君たちいと多くめでたくてものしたまへど、ただ今は、え内、東宮にも思しかげず。

(③四三八頁)

民部卿俊家の「時うしなへる」とは、頼宗長子でありながら、弟能長が叔父能信の養子となり、養女茂子を東宮に入れて後三条天皇を生んだ関係で、女道子を後三条天皇皇子の東宮妃として入れたことに較べて、「時うしなへる」と評したもの。天皇や東宮に入れて

おかしくない「めでたくてものしたまへる」俊家の四女と師通が結婚することになったという流れを物語つたことになる。

実は、師実の結婚のときも、源麗子は本来東宮(後の後三条天皇)に入内させたかったが、東宮妃にはすでに馨子内親王や能信養女茂子がいるので、師実と結婚させたと記された(前稿第二節)。また後述するように、師実兄の通房も、卷四〇で忠実の結婚も同様に記し、撰関家嫡子四人に共通する書き方となる。

さて、師通の結婚を記した後には、『丙「師房の病惱」正月(承保四(二〇七七)年)に、師通の母方の祖父源師房について記す。師房は、「十余日より、風起らせたまひて」とあり、『三「師房薨去」、『三「師房室、尊子の幸い」と物語られていく。

〔三〕 右の大殿の風さらにおこたせたまはで、いと苦しうせさせたまへば、恐ろしきことを思しめす。二十日のほどなどには、いと重くならせたまへれば、殿の上も渡らせたまひておはします。二月十七日に太政大臣の宣旨下りぬ。いとめでたき御ありさまになん。

(③四八七頁)

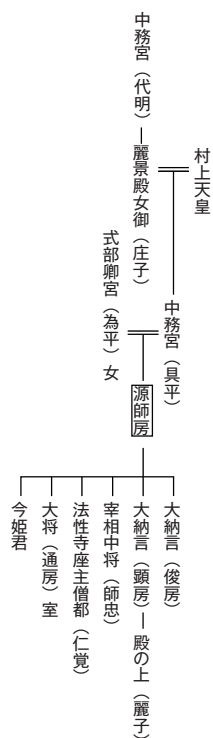
師房は、関白頼通室の弟という縁で、道長生前に頼通の養子となり、続編では卷三一の開始時から登場してきた。それが、傍線部のように太政大臣に任じられた時点で、祖父の村上天皇に遡つて系譜をたどり、また中宮賢子と一の宮から「殿の上」をはじめとする子女たちが、次頁のような人物名を挙げ記されることになった。

師房が、父方も母方も、皇族の血筋であることを述べ、

御かたちいと愛敬つき、ものものしくものせさせたまひ、御才おはしまし、御手めでたく書かせたまふ。

(③四八八頁)

と、その人物の器量についても言及した。



大政大臣となり薨去直前に、師房は系図をたどりながら、正面きつて描かれたことになる。

続いて、「三」「師房室、尊子の幸い」を描く。師房室尊子は、道長女ながら、他の姉たちのように后、東宮妃、院の女御にはならず、中将師房と結婚したが、長命で七十余歳まで夫とともに生きてきたことを「いとめでたし」と記している。そして、師房薨去の時と同様に、その子や孫曾孫(傍線を付した)に言及している。

……関白殿の上、大納言たち二人、御孫にて、中宮の一の宮、姫宮など生みたてまつらせたまへるを見たてまつらせたまふ、いとめでたし。大將殿の上などを、内に参らせたまつらせたまふべかりしかど、後一条院には、入道殿の故中宮さぶらはせたまふ、後朱雀院には、陽明門院の一品宮と申ししを参らせたまつりおかせたまひてしかば、故二条の関白殿、堀河の右の大殿など、え参らせたまつらせたまはで、末の世に後朱雀院にこそは参らせたまへりしかど、后の御本意かなはせたまはず。隙ひまなかりしを御覧じて思し絶えさせたまひにしかど、いとめでたく、中宮をかくて見たてまつらせたまふ。殿の上の子にしたてまつらせたまひて、かくもしたてまつらせたまふかひあ

りて、御おぼえ世の常ならず、世のためしにもしつべくおはします、いとめでたし。
(③四八九頁)

右の尊子の子や孫は、最初に名のあがつた師実室麗子の家系を辿ったことにもなる。続編では、師実もさることながら、この源麗子という存在を重視して読むべきと思う。

さらに右には、「大將殿の上」、つまり関白頼通の嫡子通房室に対して、点線部のように、後一条天皇か後朱雀天皇かに嫁がせたいと思っていたと記している。卷三五はほぼ全巻を通して大將通房とその死を悼む巻であったが、この師房死を悼みつつ、妻尊子の幸いを語る箇所、初めて、通房室が撰関家嫡子の結婚にふさわしい女性として、師実・師通の結婚相手と同じような書き方がなされている点に注意したい。卷三五時点で師房はまだ大納言でしかなく、太政大臣となったここで初めて記せたものであろう。

続くのが、「三」「師通、大將となる」という記事である(承保四(一〇七七)年四月九日に任大將。後文にあるように「十六歳」の時。師通の母方の系譜が辿られその後に、師通が、「三位中将」から「宰相」となり「大將かけさせたまひつ」と記された。そして、「殿こそは中納言中将」から大將になったのだが、と父師実に較べられている。大將になった儀式には、俊家女の師通室もやってきたこと、「今年ぞ大將殿十六にならせたまへど、いと大きやかに、うつくしう愛敬づき、めでたくおはします」と、その風姿が記されている。

続くのは、「賀茂社」に關係して、白河天皇の行幸と師実の撰関賀茂詣みやぎが並んでいる。

「三」「賀茂社行幸のこと」
行幸は、この御時には、年ごとに御阿礼みあれの日せさせたまふ。

はじめたりし年、資綱の中將、

〔和歌欠〕

と詠みたまへりき。

〔四〕師実、賀茂社に詣る」

関白殿の御賀茂詣でに、例の世にありとある人、御前し、上達部、殿上人参りたまふに、颯いと重りかためてたき御有様なり。中納言、宰相など渡りたまひて、末つ方に宰相にて大將殿、隨身番はせたまひ、御前しておはします、いとめでたし。いとふくらかに愛敬つき、匂ひやかなる御有様にておはします。

(③四九一頁)

白河天皇の賀茂行幸について、前掲三橋正氏論文を参照する。「神社行幸によつて、天皇の神祇信仰と權威を示そうという姿勢」は、白河天皇の時代にピークを迎えるという。白河天皇は後三条天皇に倣つて、計十社への一通りの神社行幸を承保二(一〇七五)年、承暦元(一〇七七)のうちに終えた。代始めの賀茂・石清水の二社行幸は承保二年に終えたが、『扶桑略記』承保三(一〇七六)年三月四日に石清水に行幸、さらに四月二十三日(戊申)条に賀茂社行幸を記し、別の御願によつて「毎年春三月為石清水行幸之期」、又毎年四月中申日為賀茂社行幸式日」と、毎年の行幸として位置づけたという。

〔三〕の「御阿礼の日」とは賀茂祭前日「中申日」のことで、三橋氏は、従来撰関家賀茂詣が行われる日であったと指摘する。堀河天皇時代になると、毎年の石清水社・賀茂社の行幸はなくなり、撰関賀茂詣は寛治元(一〇八七)年以降、もとの式日に復されたという。

ところで、〔四〕師実の撰関賀茂詣は、師通が大將になつた承保四

(一〇七七)年に記す。ここで、末松剛氏「撰関賀茂詣の成立と展開」を参照したい。「撰関家」賀茂詣の儀として確立するのは、道長(前撰政・頼通(現撰政)二人による寛仁元(一〇一九)年であり、それ以前は「大臣賀茂詣」の性格であつたという。また、師実初度の撰関賀茂詣だが、承保三年と確認される。続編では、ほぼ毎年行われた関白師実の賀茂詣を、師通が「大將」に任じた年に記した。「めでたし」と、師実一家の栄華の一齣として意識しているのは確かであり、続編には「大殿」呼称があることから、「大殿」道長と「撰政」頼通同様に、内大臣師通が関白になつてからは、例年「大殿」師実と二人の参詣であつた。二人ゆえに供奉する人々も奉納もより膨らんでいたのであろうその光景を、目の当たりに見物していた可能性は高い。なお、点線部のように、また、師通の外貌を記している。

次の師通登場は、五節を出だす、という次の記事がある。

〔四〕五節、大將殿出させたまふ。世の常ならんや。女院、四

条宮など、童女、下仕の装束目もあやにせさせたまへり。うつくしき童女などえりととのへさせさせたまへり。(③五〇一頁)

師通が五節を出すのに、女院章子内親王と四条宮寛子がならんで協力している。それもまた、前稿に記した巻三六の〔四〕師実、五節の舞姫を出す」の記述と同様である。

中村成里氏「藤原師実・師通・忠実」は、『栄花物語』続編が、「賛美される師実と予祝される忠実、それに比して相対的な評価が低い師通に関する記述の特徴を、『今鏡』と比較しながら明らかにする」とされた。だが、本節で述べたように、師通は父師実の描き方を踏襲し、同じように賛美されている。中村氏は、「忠実周辺が続編の成立に関与した可能性」を、『中外抄』『富家語』なども視野に入れ

述べているのだが、続編成立時期の確認とともに、『栄花物語』が女房の手による女性のための物語であることを思うとき、その頃の女房たちの交流や文化面などから見えていく必要がある。

続編の師通にもどる。赤裳瘡を患った一の宮敦文親王が亡くなっ
てしまったのだが、

〔五〕「賢子、善仁親王を生む」

という慶びごと（承暦三（一〇七九）年七月九日誕生）と並んで、

〔五〕「師通男、忠実、誕生」

の記事（承暦二（一〇七八）年誕生）を置く。後者には、

大將殿は、御かたち、有様、匂ひやかに愛敬つき、めでたき御

有様なり。若君のいとうつくしき出でおはしましたれば、殿に

迎へたてまつらせたたまひて、殿世になくかぎりなきものにかし

づき思ひまうさせたまへるさま、ことわりなり。（③五〇二頁）

点線部の師通の外貌と雰囲気、また同様に記されている。善仁親

王記事と並べるのは、師実孫の世代を並べたことになろう。また、

卷三六に東宮妃と師実室の男子出産記事を並べた書き方（前稿第二

節）が思いおこされる。

師通は忠実母全子との関係が疎遠になる。病がちな父俊家は、孫

忠実は関白のもとにひきとられ、その後ろ盾ゆえに安心だがと、残

される女たちの将来を思いわずらう様を描いている。

師通は、〔五〕母方の叔父俊房と頭房が左右の大臣になった折に、

内大臣となる。続く〔五〕「善仁親王、祭およびその還立を見物」

の記事が巻末となった。第二節に言及したように、本文の不安はあ

るが、父「大殿」師実が善仁親王に同車し、「殿」内大臣左大將師

通が他の人々とともに供奉する書き方に注意したい。善仁親王は次

巻で堀河天皇として即位するが、ここで師実・師通という二人の盤
石な後見人を描き入れたことになる。

四 卷四〇「紫野」の師実

——中宮賢子の崩御、東宮の薨去、善仁親王帝位につく——

卷四〇は、白河天皇の御代二年余と、皇子善仁親王が帝位につい
て六年ほどの期間を対象にして記す。

巻頭は、「殿には、宮たち、若君の御袴着など、御いそぎのみし

きる。めでたき御事のみ多かるに、」と言及してから、師実が思い

かけていた天王寺参詣に「応徳元（一〇八四）年九月十二日」に出

立する、と続く。姉の四条宮寛子も同道し、師実室麗子もともなう。

女房車は、師実方と宮方とそれぞれ三輛、日ごとに装束を替えてと、

女房たちの服飾に言及し、上達部や殿上人も残り少なくて同行すると

記した。ところが、

〔二〕……御遊びなどあるべきを、中宮例ならずおはしますとい

ふことありて、華やかなる事はとまりぬ。歌など、殿の御方、

宮の御方にも、さまざまをかしくて多かり。宮の御心地重くお

はしますとて、十七日に急ぎ帰らせたまひぬ。（③五一頁）

中宮不例により「華やかなる事はとまりぬ」とある。とともに傍線

部、殿の御方と四条宮方に詠歌があったとする。新編全集頭注は、

後二条師通記の十七日条「中宮ノ御惱ニ依り、和歌之ヲ留ム。関白

殿、大盤所御同車シ、参内セシム。中宮ノ御惱、重ク患ヒ給フ、ト

云々」を引用する。だが、天王寺参詣は住吉社参詣をとまなうもの

だが（扶桑略記）、傍線部にあるように、その時の詠歌が指摘されて

いる。^②

(三) いと重くおはしましけり。日を経て重くならせたまひて、九月二十一日、うせさせたまひぬ。あさましなども世の常なり。いづ方にも思し嘆かせたまふさま、いひやる方なし。右の大殿の上、殿の上など、ただ思ひやるべし。内の御前にはことわりとは申しながら、いふ方なくたぐひなく思しめし入らせたまへり。またこれをいみじき嘆きに、殿よりはじめ嘆かせたまふ。東宮大夫など思ひ嘆きたまふことかぎりなく、宮々も殿に出でさせたまひぬ。斎宮おりさせたまひぬ。

内には月日のゆくも知らせたまはず、つゆの御湯なども召さず、沈み入らせたまひて、夜大殿の外にも出でさせたまはず。女房なども、睦ましくさるべき限りぞ参りける。……

(三五一頁)

中宮賢子の病は重く二十二日に崩御。中宮の母たちの悲しみ、白河天皇の悲嘆ぶりに師実はじめ臣下は心配する。宮々(善仁と令子)は師実邸に移り、媞子内親王は斎宮を退いた。

天皇は月日を経過しても、「つゆの御湯」なども召しあがらず、「夜大殿」に籠もりきり、近しい女房にしかまみえない。五節もとまる。以降、時間は急ピッチに進む。

年が改まつても(応徳二(一〇八五)年)、同じように悲しみに沈んでいる天皇は、「月ごと」に丈六の仏を作らせたまふひ、御堂を造らせたまふ、「前の世の御契り推しはからるる」とあり(三)、その年「裳瘡といふこと」がおこり、「応徳二年十一月八日」に東宮実仁親王が亡くなった(四)、と記す。

「月日は変はれど」(応徳三(一〇八六)年になる)、白河天皇は政に

もお出ましにならず、鳥羽殿の造営をはじめられたのは、讓位の準備かと人々が思っていたところ、

(五) ……十一月二十六日に、二の宮に御位譲り申させたまふ。今年ぞ八つにならせたまふ。故宮の御事の後は、五節、臨時祭さま変りて、出でさせたまふこともなく、……賀茂に、御阿礼の日ごとに行幸のありつるもとまり、斎宮などもまだるさせたまはざりつるも、かく思しめしければこそと、……

(三五一頁)

善仁親王に讓位する。中宮崩御後は五節や臨時祭にもお出ましになることはなく、また、例年の賀茂行幸も中止になっていたと記す。記録類で確認すると、年毎の賀茂行幸が、中宮崩御の翌年応徳二年と三年と行われていない(石清水行幸も同様)。

(六) 十二月十六日御即位なり。御輿に、角髪結ひて奉れる、めでたきにも涙ぐましく、故宮のまして見たてつらせたまはましかばとあはれなり。御乳母たち典侍になりなどいとめでたし。

殿、撰政させたまふ。ことわりのことなれど、さしあたりてはまたいとめでたし。(三五六頁)

堀河天皇の即位、「殿」師実が撰政になったことを記す。

その後は、白河院は心にまかせての御幸や物詣でがなされたこと記す。白河女御道子腹の善子内親王が斎宮となる。「前斎宮上らせたまへれば、殿にも同じ御ごと思ひかしつき申させたまふ。院に入らせたまひて、院にのみおはします。」と媞子内親王は父院の御所にお入りになり、院は故中宮のことを忘れる時とてなく、内親王方ではばかり過ごされたことある(七)。

堀河天皇の大嘗会御禊には(八)、女御代に師実女(母は美濃守基

貞女)がつとめ、「殿の上、姫宮たち(令子・横子内親王、院、前齋宮(嬬子内親王)などみな御棧敷にて御覧す」、また、陽明門院と四の宮(篤子内親王)も見物された。故東宮の母基子と元服した三の宮にも触れている。

翌寛治二(一〇八八)年正月、白河院への朝覲行幸があった(三二)。白河院は二月二十二日に高野山に御幸する。「殿、内大臣殿は御送りばかりして帰らせたまふ。左右の大殿は詣でさせたまひけり」とあり、「はげしき山」を歩む院についても言及、帰京の日付も記されている(三三)。

続くのは、「石清水社」がらみの記事二つが並ぶ。まずは、忠実関係。卷三九に忠実誕生、卷四〇巻頭に袴着が記されていたが、

(三) 臨時祭に、内の大殿の若君、殿におほしたてたまつらせたまへりつる、この正月二十一日に御元服させたまひて、侍従になしたてまつらせたまへるが、少将にならせたまひて舞人せさせたまふ。(③五二〇頁)

「元服」(寛治二年正月二十一日)を記し、「侍従」から「少将」になり石清水臨時祭に舞人をつとめる、という登場である。祖父師実や父師通同様に、まず元服、次いで臨時祭の舞人(前稿第二節)や春日祭使(本稿第三節)をつとめると、同じ書き方がなされている。

(四) 八幡の行幸つごもり方にありて、還さにかの鳥羽院におほしませたまふ。十余町を籠めて造らせたまふ。十町ばかりは池にて、はるばると四方の海のけしきにて、御船浮べなどしたる、いとめでたし。故宮うせさせたまひては、いづれの宮たちをも見たてまつらせたまふこともなく、なかなかに見たてまつらんにつけて催されぬべしとて、この二三年ばかり、かくいみ

じき御有様どもを見たてまつらせたまはざりつるを、御禊のほどより、齋宮(嬬子内親王)をも見たてまつり、内をも、御禊の後、行幸もたびたびありなどして、殿におほします姫宮(令子内親王)見たてまつらせたまふなりけり。日一日もてあそび、よろづのをかききことを尽して御覧せさせたまつらせたまひて、還らせたまひぬれば、名残恋しく思しめさるらんかし。ただ齋宮の御方にのみおほします。をりをりの春秋の花紅葉の盛りにも、をかきき歌多く、御遊びあり、心をやりておほします。功德の方のこともうち添へ、思ふさまにめでたき御有様なり。ただ宮のおほしませぬのみぞ、あはれに口惜しきことなる。

(③五二〇頁)

堀河天皇が石清水八幡宮に行幸し(即位後初度、その帰途に鳥羽殿の父白河院に立ち寄る記事である。鳥羽殿の広大な結構と海のよくな池に言及する。白河院が、朝覲行幸を受け、また姫宮とも交流、齋宮嬬子内親王方にばかりいらつしやること、歌会や管弦の遊びをし、功德の方も加わつてと、理想的な上皇の姿を映し出している。

続く(五)は、卷名「紫野」の由来となる、賀茂祭と翌日の還立を白河院と嬬子内親王が同車して見物するという場面が描かれる。祭当日、嬬子内親王付きの女童たちのかわいらしい様子に、女房たちも着飾りいどみ、そろつて出かける。翌日も還立を御覧になる。

……殿にもさまざまにいみじうしつくしたり、院の御車は、殿の御棧敷見やらるるほどなり。午時ばかりに、院と齋宮と一つ御車におほします。齋宮をば口に乗せたまつらせたまひて、後におほします。いとかたじけなくあはれなり。御直衣の袖のほのかに見えさせたまへる、いみじうあはれにかたじけな

し。……殿をはじめたてまつりて、左右の大殿、内大臣殿、大納言たち、それより下はた残るなく仕うまつれり。殿をはなちたてまつりては、大臣たちもみな御馬にてさぶらひたまふ。世にいみじき見物になんしける。……

還さも同じことにて御覽す。……さきさきかく心のどかにことなくておりさせたまひておはします帝、久しくおはしまさざりつれば、世にめでたきことにぞありけるとめで申しけり。齋院の、御車とどめさせたまひて、入り果てさせたまはず、院の還らせたまふを御覽するを、人めで申しけり。あるべきほどは何となくて過ぎぬ。鳥羽に宮たち渡したてまつらせたまひて御遊あそびあり。御心をやらせたまひて過ぐさせたまふ。

(③五二二頁)

祭当日、院が、媿子内親王を牛車の前にのせ自分は後ろに座る姿は、人々の感動を誘う。関白師実しゐは車、左右大臣や内大臣師通以下の公卿らは馬でお供するのも、人々の見物対象となる。翌日は、紫野で還立を御覧になる院について記し、理想的な上皇としての暮らしぶりを賞賛する。そこに、傍線部のように、「宮たち」つまり、師実家の令子内親王(養女)と四条宮寛子養女の楨子内親王を鳥羽に呼び寄せ、三人の宮たちと御遊あそびなどとして、白河院と姫宮たちとの絆が、くりかえして記されている。

その後は第一部に描かれた後冷泉院の後たち、女院章子、皇太后歎子、四条宮寛子らの動向を記して後、齋宮善子の伊勢下向する前に、「五」に描かれた齋院は母の死にあい退下、摂政師実邸に住まう令子内親王が齋院卜定される展開を記していく。

〔五〕……定まらせたまひなば御対面難かるべければ、院に渡ら

せたまふ。四条宮の姫宮(楨子内親王)も渡らせたまふ。若き人々、薄物、綾、縑かぢの単襲の色々なるに、裳、唐衣などめでたくをかしう、花の色々を織りつくして十人、さらに大人などは織りたる五重なる三重なる、浮線綾ふせんれうなど着たるもあり、四条宮の姫宮の御方にも四人ばかりぞさぶらはせたまふ。かたち、有様心ことに選えらせたまへり。齋宮の御方(媿子内親王)もおろかならんや。院いづれをもおろかならず見たてまつらせたまふ。かくて六月つごもり方にゐさせたまひぬ。人の家におはします。またの年の御禊にぞ、大膳職に渡らせたまふ。御禊の有様などいとめでたし。履子はきなどさへ選えらせたまへり。

(③五二六頁)

令子内親王が齋院となると対面は難しいということ、院に参上する。令子内親王付き女房十人の衣装がくわしい。四条宮養女の楨子内親王も白河院に渡り、院にいる媿子内親王内親王と姉妹皆が集つて父院のもとで過すごす。そして令子内親王は、齋院となり(寛治三年六月二十八日)、翌年の初齋院入りまで(寛治四年四月)を記す。このように讓位後の白河院が、亡き中宮の形見の姫宮たちと過すごす有様が何度となく物語られている。続いて、善子内親王は母女御道子とともに伊勢に下つていく(寛治三年九月一日)記事を置く。

こうして続編を閉じていくのだが、巻四〇末尾は、師実孫忠実に関する、

〔三〕「忠実、源俊房女と結婚」

〔二〕「忠実、春日祭の上卿を勤める」

という二つの記事を置く。

〔三〕内の大殿の少将殿、今は三位中将とて、世になく華やかな

る御有様なり。左の大殿（源師房）の御婿にぞなしたてまつらせたまへる。内宮（内宮）など思しめししかども、殿の申させたまふに従はせたまふにもことわりにぞ。

内大臣師通の子忠実が登場、左大臣俊房の女と結婚したとある。点線部師実や父師通同様、結婚相手は天皇が宮に入れたい女性と記す。「殿」師実の要請に従ったとする。新編全集に、寛治三（二〇八年正月二十九日）「露頭」（とこあらわし）があつたと注する。

続編の最終記事は、忠実が中納言となり（寛治六（一〇九二年正月）、春日祭の上卿をつとめた二日間が記される（二月七日、八日）。下向の日と翌日帰京が記されている。

〔二〕……宇治殿に四條宮おはしますころにて、宇治橋見やらるるほどに御棧敷いみじうめでたくて、女房の衣のこぼれ出でたるほど、絵にかかまほし。まことに目もあやなり。思ひかけぬ宇治のわたりの御棧敷の前渡る人々、女使の内侍など、用意なくていかたはらいたくつつましながら渡るほど、まばゆく思ひけり。木津河など渡らせたまふほど、えもいはずおもしろうをかしかりけり。かくて佐保殿に着かせたまひて、祭の儀式有様、世の常ならずめでたくてまゐらせたまふ。積れる人、大殿のかくておはしましたしに、御孫にてかくおはしますを、枝々栄え出でさせたまふを、春日の神も心ゆかせたまひてや、めでたく見たてまつらせたまひけんと、心の中に思ひ余りけるを、同じ心に賤の男までめで思ひ申しけり。

〔三〕（五二八頁）
四條宮寛子が宇治殿の棧敷席から一行を見物したという。「女使」は、この時周防内侍が奉仕した（為房卿記）。傍線部「用意なくていかたはらいたく……」は、いかにも当事者的な表現である。また

傍線部「積れる人、大殿のかくておはしましたしに」と、師実が祭使をつとめたことを知る視点人物、「積れる人」とは、師実が天喜四（一〇五七年・康平五（一〇六二年）年上卿となったことを知る（定家朝臣記）、後冷泉朝を生きた人となる。また、波線部は、春日の祭の帰路に詠まれた、続編末尾の和歌と重なっていく。

なお、春日の祭に関して、忠実上卿の折に師実が上卿をつとめたと記す。巻八の頼通の春日祭使以来、巻三二の通房の春日祭使、そして、第三節に述べた師通の春日祭使と、撰関家嫡子のみが『栄花』正統編ともに春日祭の記事をもつ。

続いて、翌日のことを次のように記して続編を結んでいる。

またの日歸らせたまふ。御供の人々みな、今日ばかり装束うち乱れ、今少し思ひやり深く、世にまた三笠の山のかかるたぐひなく、めでたう思ひあまりて、車ひきとどめつつ、道すがら見る人の、

行く末もいとど栄えぞまさるべき春日の山の松の梢は
など、古めかしき人の思ひける。

〔三〕（五二九頁）
こうして、師実と孫忠実に焦点化し、撰関家の未来を祝して閉じている。最終記事が寛治六（一〇九二年）二月のことで、忠実結婚から三年後、令子内親王初齋院入りより約二年後で、その間の出来事は省略されていることになる（注16参照）。

巻三九の開始と結びは師実の関与記事であったが、巻四〇の開始と結びも師実が登場している。巻三九巻末では天皇家の未来が予祝され、巻四〇末尾は撰関家の未来を予祝する、対応させる意味あいがあったろう。

続編の世界はまだまだ読み解けていない、後考に期したい。

注

- 1 この末尾文章について、桜井宏徳氏「『栄花物語』続編における「書く」こと——正編との関わりを中心として——」(『文芸研究』179 二〇一五・三)が、巻三六末尾の「かきつく」という語を検討して、正編との関係性に言及する。栄花物語の筆述について、作り物語との差異からも明らかにしている。
- 2 福長進氏『歴史物語の創造』(笠間書院、二〇一二年)第一部第十一章「『栄花物語』続編について」。初出、二〇〇二年。
- 3 「源基子と桐壺更衣」(『国文論叢』57 二〇二一・一)。
- 4 後三条天皇に御代がかわる直前、頼通弟の教通が閑白となり、左大臣を辞したところに師実が就いたものであった。巻三七と巻三八との間のことで、続編に記述はない。
- 5 詳しい系譜記述がなされている。賢子の実父(源顕房)は、右大臣師房の二男、「中納言左兵衛督」で、師実室麗子ときょうだいと記す。実母についても、省略部に、「宇治大納言(源隆国)の御子の隆俊の中納言とて、皇太后宮(四条宮寛子)大夫にてもしたまふ、才あり、かたちきよげに、よき上達部にてもしたまふ、御女なり」と紹介がある。
- 6 『平安時代の信仰と儀礼』(続群書類従完成会 二〇〇三)第一編第一章第三節。
- 7 頼通が、中宮姫子の死後、祐子内親王を大切にかしづいていた様子は、拙文「受領家司歌人藤原範永」(『範永集新注』(青簡舎、二〇一六)解説二)でも触れた。
- 8 『藤原頼宗集 師実集注釈』(花鳥社、二〇二二)の解説Ⅱ「頼宗の立場とその役割 付、法華経二十八品歌」、解説Ⅳ「末っ子の閑白、藤原師実」に触れた。
- 9 僧侶の頼通薨去をめぐる和歌として、為仲集Ⅱに、
実源阿闍梨が、宇治殿の御事など思ひいでたるにやあり
けむ、言ひおこせたる
知るらめや霞となりて昇りたる人のすみかの春のけしきを
為仲は四条宮寛子に長年小進・大進・権亮・亮として仕えてい
る。承保三(一〇七〇)年に陸奥国司となったが、その赴任先に
贈られてきたもの。頼通薨去後二年以上経ていて、続編に記した
背景の一端が知られる。
- 10 坂本賞三氏『藤原頼通の時代 摂関政治から院政へ』(平凡社、一九九二)「七 後三条・頼通・彰子・教通あいついで世を去る」(八その後)。
- 11 巻十一に内裏退出で軽く触れ、他は巻十四に一例のみ。行成女と道長息長家との結婚が「三月二十余日のほど」に決まると、「その日石清水の臨時の祭の使ひに、この君おはすべかりければ、殿の御前こと人をさしかへさせたまふほどの御心掟を……」(②一四八頁)と、扱いは軽い。
- 12 ちなみに、学習院大学の本には、「大殿」の「大」字は本行ではなく、右横に記す。現行の続編本文はかなり問題とすべき箇所が多い。また、「大殿」呼称についての精査も必要なので、後日に期したい。
- 13 『栄花物語全注釈』ではこの「殿」を師通とするが、新編全集の師実説に従う。

14 『公卿補任』で、堀河天皇の即位二年目の寛治元(一〇八七)年を見ると、家忠が権中納言左衛門督(二六歳)、経実が従三位右中将(二〇歳)、能実が叙従三位(撰政四男)とある。一八歳)と全員公卿となっている。

15 「忠教」のみ、康和二(一一〇〇)年に、師実「五男」「母故散位藤原永業女」として藏人頭中將から二六歳で参議になった。続編の物語る年代より後のこと。

16 『尊卑分脉』に、師実女欄に篤子内親王の名が見える。『藤原頼宗集 師実集 全釈』(花鳥社、二〇二二)解説IVの拙文「末っ子の関白、藤原師実」で触れたように、彼女は寛治五年十月二十五日に堀河天皇に入内した。同七年二月二十二日に師実邸の高陽院で立后する。『扶桑略記』に「関白従一位(師実)之養子」(寛治七年二月二十二日)と記すように、内親王ながら撰関家の娘として後見されてゆく。

17 注6に同じ。

18 『平安宮廷の儀礼文化』(吉川弘文館、二〇一〇)第一部「儀礼に見る撰関家の動向」第三章。

19 『中右記』長治元(一一〇四)年四月十七日に、忠実は初度の撰関賀茂詣の際に、師実の「承保三年最前御賀茂詣例」という初めての賀茂詣例に依拠している。

20 肥後は当初師実家に仕えた女房だが、その家集に、

二条の関白、はじめて賀茂詣でせさせたまひしに、太上おほまき大臣おとどもやがて具せさせたまひたりしかば、

もろは草ひき続けたる今日こそはながきためしと神も見るら
め(一一三〇)

とある。師通のはじめての撰関賀茂詣に父師実も同行した際の歌だが、『肥後集全注釈』(新典社、二〇〇六)に、『中右記』寛治八(一一〇四)年四月十四日のことと注する。なお、十四日は甲申、「御阿礼」の日。

21 中村成里氏『平安後期文学の研究——御堂流藤原氏と歴史物語・仮名日記——』(早稲田大学出版部、二〇二二)第二部「栄花物語」正編から続編へ」第三章。

22 久保木哲夫・花上和宏氏『康資王母集注釈』(貴重本刊行会、一九九七)が、次の歌をこの時の住吉参詣と注する。

同じ宮の御住吉詣でに

八 住吉の松と聞きては年ふれどかかるときはの色をこそ見ね

キーワード

賢子の東宮参り 撰関家嫡子の結婚 源師房 養女となった内親王たち 正編との連結

受領日 二〇二二年四月二五日
受理日 二〇二二年六月 八日